

神戸市立摩耶兵庫高等学校 学校評価報告書

校長名 山内 紫乃

記入者名 片山 健史

神戸の教育が目指す人間像

神戸が目指す これからの学校の姿

心豊かに たくましく生きる人間

人がつながり ともに創る みんなの学校

り学の
校の
目づ
標く

豊かな人間性と生き方の創造

内容	重点的な取組み	評点 (4段階)	特記事項 (学校自己評価)	関係者評価 (学校自己評価に対する学校運営協議会の意見等)	学校自己評価、関係者評価を踏まえた 次年度の重点的な取組みの案
①基礎学力の定着に取り組み、学びに向かう力を育む ②多様な生徒の個性を引き出し、主体性を育む ③地域社会と連携し、社会性や協働する力を育む					
主体的・対話的で深い学びの充実に向けた授業研究の推進	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、並びにICTを活用した授業実践に向けた授業公開と研修	3	・公開授業・研究授業を通じた授業力向上への取組は実施できている。しかしiPad等のICT機器が生徒数に満たないことについては今後の課題である。 ・定期考査ごとに生徒へのふり返りアンケートを実施し、生徒の学力向上や自己調整学習能力の育成に向けた試みがなされている。 ・公開授業週間以外にも、教科内で研究授業・研究協議の場を設けるなど、授業改善に向けた自主的な動きが見られた。	・授業研究を各教科ごとに行い、改善したいテーマを設定する事が重要。重点項目を絞り、何が課題で、それをいかに改善していくのかを全教員が考えるきっかけとしての研究授業が必要である。 ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善やICTの活用は全年代に関わる課題であり、授業公開の開催と研究協議会の実施を年度計画に組み込むことが必要である。	・月に一度教科会議を行い、観点別評価にかかわる情報共有や評価の付け方などの検討を行う。また、教科ごとのTeamsでグループを作成し、そこで随時報告や相談を行う。 ・各教科で観点別評価・シラバス担当者や、それが中心となって教科会議等で評価基準やシラバスの見直し・検討を進めていく。さらに担当者会議を学期ごとに開き、各教科の進捗状況や課題等の共有を図る。
	・各教科でシラバスや観点別評価についての研究と情報を共有する		・観点別評価の方法については、定期的に教科会議を持ち、情報共有がなされている。時間講師については評価基準を事後承諾のような形で伝達している。 ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実と、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業力向上を目指すにあたり、教職員側のICT機器活用のスキルアップは喫緊の課題であるといえる。	・GIGAスクール構想開始から4年経ち、さらに神戸市においては生成AIの活用を視野に入れた教職員研修がすでに実施されている。高等学校ではBYODによる一人一台端末を定時制高校でも本格導入することにより、教育活動の質的充実が大いに期待できるところである。 ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実と、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業力向上を目指すにあたり、教職員側のICT機器活用のスキルアップは喫緊の課題であるといえる。	・月に一度教科会議を行い、観点別評価にかかわる情報共有や評価の付け方などの検討を行う。また、教科ごとのTeamsでグループを作成し、そこで随時報告や相談を行う。 ・各教科で観点別評価・シラバス担当者や、それが中心となって教科会議等で評価基準やシラバスの見直し・検討を進めていく。さらに担当者会議を学期ごとに開き、各教科の進捗状況や課題等の共有を図る。
	・教科横断的な学び、探究的な学びの実践		・総合的な探究の時間では、「探究活動の進め方」「志望理由の組み立て方」冊子を利用して各学年間の情報共有がなされ、学年色豊かな探究活動が行われている。 ・年度当初の探究活動研修では、各学年の取組を全教員が共有し、探究活動における総合的な探究の時間や学年行事のあり方や持ち方について考える機会となっている。	・中学校では、総合的な学習の時間やトライやるウィーク等を通じて様々な職業を知る・体験する活動が展開されている。高等学校においても、将来のありたい姿・卒業後の進路から逆算し、学年ごとに段階を踏んだ継続的かつ系統的なキャリア教育が求められる。それらを通じて個々の生徒の資力・能力、得意分野を分析し、可能性を引き出し出していくことができるのではないかと。 ・かつての終身雇用制、生涯を通じて一つの仕事、一つの企業で勤め上げるという概念はなくなりつつある。経済的な豊かさや、多様な職業感・勤労観によって、キャリアアップによる転職率の上昇傾向が予測される。「働くこととは」という根本に立ち戻り、主体的に進路を選択する能力・態度を育て、一人ひとりが自立し、他者と協働して生きていく人材を、学校教育全体を通じて育成することが重要である。	・校外学習や修学旅行等の行事や探究活動等をキャリア教育の一環として位置付ける工夫が必要。 ・各学年の取組について情報共有の機会を設定し、学年色豊かなキャリア教育を推進する。 ・4年間のスパンを踏まえ、卒業後の進路に向けた段階的かつ系統的なキャリア教育の実践を行う。その実現のため、各学年の目標設定、年間実施計画をキャリアセンターを中心として行う。 ・進路ガイダンスに参加している企業や学校に変化を持たせ、同じ学問分野・業種を再度選択しても異なった角度の情報入手ができるような工夫が必要。
社会的・職業的自立に向け、自分らしい生き方を育むキャリア教育の推進	・学校教育活動全体をキャリア教育の視点で取り組む ・校内外のガイダンスの充実 ・体系的で効果的な進路指導計画と実践 ・キャリアセンターの更なる充実 ・図書館の充実と利用者の増加	3	・総合的な探究の時間の活動内容はキャリア教育として充実してきた。他校や外部機関との意見交換などの機会も持たれた。 ・SDGsなどの社会問題について考えることで、将来や社会について学ぶ機会が増えている。 ・キャリアガイダンスを通じて、個々のアイデンティティや将来の進路について主体的に考える機会があり、適切なキャリア教育がなされている。 ・自身の将来や学ぶことの重要性を自分事として考えるきっかけとなるガイダンスが充実している。 ・キャリアセンターにおいて、進学や就職の主体的な学びの場としての活用が多く見られる。授業で図書館を利用する教科が増えている。 ・図書館を居心地の良い空間にするための創意工夫がなされている。	・中学校では、総合的な学習の時間やトライやるウィーク等を通じて様々な職業を知る・体験する活動が展開されている。高等学校においても、将来のありたい姿・卒業後の進路から逆算し、学年ごとに段階を踏んだ継続的かつ系統的なキャリア教育が求められる。それらを通じて個々の生徒の資力・能力、得意分野を分析し、可能性を引き出し出していくことができるのではないかと。 ・かつての終身雇用制、生涯を通じて一つの仕事、一つの企業で勤め上げるという概念はなくなりつつある。経済的な豊かさや、多様な職業感・勤労観によって、キャリアアップによる転職率の上昇傾向が予測される。「働くこととは」という根本に立ち戻り、主体的に進路を選択する能力・態度を育て、一人ひとりが自立し、他者と協働して生きていく人材を、学校教育全体を通じて育成することが重要である。	・校外学習や修学旅行等の行事や探究活動等をキャリア教育の一環として位置付ける工夫が必要。 ・各学年の取組について情報共有の機会を設定し、学年色豊かなキャリア教育を推進する。 ・4年間のスパンを踏まえ、卒業後の進路に向けた段階的かつ系統的なキャリア教育の実践を行う。その実現のため、各学年の目標設定、年間実施計画をキャリアセンターを中心として行う。 ・進路ガイダンスに参加している企業や学校に変化を持たせ、同じ学問分野・業種を再度選択しても異なった角度の情報入手ができるような工夫が必要。 ・進路講演会等の進路行事の際に、キャリアセンターや図書館の利用やそのメリットについて説明する機会があると、さらに利用する生徒が増えるのではないかと。 ・書籍や参考書類の質的・量的充実が求められる。
規律ある生活習慣の確立と人間関係形成能力の育成	・基本的生活習慣の確立 ・時間を守る ・挨拶、言葉遣いの指導 ・授業規律の徹底 ・身の回りの整理整頓 ・教室や校内の環境整美	3	・短い休み時間中、授業開始時間に間に合うよう調整しながら行動する習慣が身についている。また、職員入室時の挨拶も定着しつつある。 ・登下校時や遅れ遅れ、教員から積極的に挨拶をすることで挨拶ができる生徒も増えてきた。 ・毎週金曜日の掃除や考査前の清掃活動によって校内環境の美化、整備がなされ、生徒は落ち着いた学校生活を送ることができている。 ・机上整理、ロッカー内整理については根気強く指導を継続していく。	・不登校経験者や人間関係形成を苦手とする生徒が増加しつつある中、定時制高校の存在意義が問われている。生徒による学校満足度アンケートの結果において、友達同士の関係や教師との関係に満足している生徒数が増えていることは、摩耶兵庫高校での教育活動に大きな成果が見取れている。時間やあいさつ・言葉遣いにおける指導の中にも、寄り添ってもってあげていくという安心感が、教師との良好な関係に繋がっているのではないかと。 ・4年間の学校生活やアルバイト等における様々な人間との関わりの中で、他者を受け入れ、多様な価値観を受け入れ認め合える力が育まれている。	・挨拶、言葉遣い、生活習慣等、繰り返し継続して指導するとともに、職員が生徒の模範となるような行動を日ごろから心掛ける。 ・理由なき欠席・遅刻、授業中の私語、課題の未提出等をなくするための基本的な授業規律については根気強く指導していかねばならないが、主体的に学ぶ楽しさ、仲間と協力しながら学び成長していくことの大切さを実感させる授業力向上・教師力向上においても研鑽が必要である。 ・校内環境整備・身辺の整理整頓を習慣化させるためにはHR・授業・学年行事・部活動など、あらゆる場面で異なった教員から様々な角度でその重要性を理解させ、実践させる必要がある。
定時制高校としての本校の魅力を発信する広報活動の充実	・HPの充実による積極的な情報発信 ・生徒とともに、全教員で学校の魅力を伝える	3	・HPで授業の様子、行事の雰囲気や部活動の様子など、摩耶兵庫高校の良さが十分に発信できている。学校見学会の参加人数が年々増えているのもHPの充実度が関係していると考えられる。 ・今年度より、資料をポスティングする形に変更したが、学校見学会の参加は例年と同程度の参加数であった。 ・学校説明会および学校見学会では、生徒が主体となって見学者に説明をすることで本校の人気の高さが伝わりやすくなったと推察される。	・全日制高校とは異なる、定時制高校ならではの特色や魅力をさらにアピールできれば、多様な生徒に対応した学校としての理解が進み、中学生にとって進学先の選択肢の幅が広がるのではと思われる。 ・ネットやSNSが普及していく中で、紙ベースでの情報源とともに、他の媒体を通じた更なる可能性を探ることも今後必要になってくるのではないかと。	・部活動においては活動内容や公式試合の有無によって異なり、情報発信量については課題はあるものの、学年の活動では各学年にHP担当を配置し、HP担当者や協力・発信に努める。 ・学校紹介の動画について中学校側からの要望・意見を参考に作成する。 ・学校見学会において、広報担当教員と担当生徒だけでなく、全教員が参加意識を持つ必要がある。
安心・安全な学校作りの推進	・効果のある職員研修の実施と情報共有 ・業務の見つめ直しと標準化	3	・教科指導、生徒理解、日本語指導、多様な生徒への関わり方等、各分野の講師を招聘し、本校の実情に合った有効な研修・伝達が行われている。 ・学校法務専門官によるハラスメント研修を実施し、教職公務員としての自覚と責任について見直しが行われた。 ・「チーム担任制」により、一人ひとりの生徒を学年全体で担当しているという意識をより明確に持つことができた。その一方で、些細なことを共有できていないところからトラブルに繋がるなど、こまめな情報共有が不可欠である。	・「チーム担任制」については、採用している小・中学校は増加している。「働き方改革」の一環としてのメリットが期待されている中、「情報共有の難しさ」というデメリットもあり、一長一短である。メリット・デメリットを洗い出し、課題の改善・克服に向けた学校全体としての取組が必要である。	・コンプライアンスや情報セキュリティなど、研修によっては内容を自分事として考え、より効果のあるものとしていくために振り返りやアンケートの実施が必要ではないかと考える。 ・1学年が「チーム担任制」をスタートさせ、適宜改善を加えながら学年経営を行っている。メリット・デメリットを洗い出し、教育的効果があるところは他学年においても継承していきたい。 ・職員会議の議事録は手書きからデジタルに移行できるのではないかと。
全市的に推進すべきこと	①いじめ防止対策に関する取組み	3	・「いじめアンケート」をもとに早期発見・早期対応に努め、生徒に寄り添った対応ができた。 ・いじめ事案が起きた場合、速やかにいじめ問題対策委員会を立ち上げ、様々な角度からの意見を聞き、指導方針を考えることができた。	・日々の授業やHR、学校行事・部活動などにおける生徒同士・生徒と教師との関わりを通じた安心できる学校の中で、自己肯定感と豊かな人間性、他者への思いやりを育み、将来へのポジティブな展望を持つことで、結果としていじめの無い学校へとつながっていくのではないかと。	・いじめ未然防止の試みとして、コミュニケーションスキルを高めるために、授業や学年行事の中で協働的な活動を意図的に取り入れる。 ・SNSをきっかけとするトラブルが多いため、講演や資料などを通じた生徒全体への指導を試みる。 ・早期発見、早期対応に努め、「いじめ防止基本方針」をもとに学校として組織的に対応する。
	②不登校支援の取組み	3	・学年と指導支援部、その他関係機関と連携・協力し、電話連絡・家庭訪問等を通じて生徒・保護者に寄り添う指導を継続して行う。	・4年という時間的なゆとりのある期間、自分のペースで学ぶことができるという点で、昼間部と夜間部を持つ摩耶兵庫高校の存在は大きい。	・学年と指導支援部、その他関係機関等と連携・協力し、電話連絡・家庭訪問等を通じて生徒・保護者に寄り添う支援・指導を継続して行う。
	③教職員の業務改善	3	・全ての職員が概ね勤務時間の範囲内で勤務している。 ・長期休業中においては、フレックスタイムや在宅勤務の制度を十分に活用し、ワークライフバランスが保たれている。 ・業務の標準化への一手としてチーム担任制を1学年で導入し、継続させていく。	・ICT活用を踏まえた授業改善、新学習指導要領と観点別評価への対応、多様な生徒への対応等、教師はますます多忙化している中、「チーム担任制」の課題改善・克服が期待される。	・学校業務の見直しにおいては具体的に可視化し、時代の流れや生徒の実情に合わないものは、思い切って無くしていく一歩踏み込んだ議論が必要。
	④保護者・地域への情報提供・発信（すぐる活用、ホームページ等）	3	・保護者への全体連絡、欠席・遅刻連絡、保護者アンケートなどですぐるが活用されている。 ・HPを通じて、様々な学校行事や部活動における活躍の記録等は随時アップされている。	・在校生とその保護者に向けての情報発信に加えて、摩耶兵庫高校への入学を希望する中学生とその保護者のニーズを踏まえた情報発信も望まれる。	・学校・学年の活動に比べ、部活動については十分に情報発信ができていない。大会結果や活動状況などをアップすることで本校の魅力をもっと伝えられるのではないかと、少ない活動時間のなかでも、充実した学校生活を送っていることが伝わる内容が更新する入学希望者増加につながると思われる。